



2008  
No. 2

The Natural Science Publishers' Association of Japan

# 自然科学書協会会報

発行人・本郷 允彦  
編集・広報委員会  
発行・2008年4月15日

社団法人 自然科学書協会

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-101 文化産業信用組合内 TEL03-3292-8281

URL: <http://www.nspa.or.jp/>

## ● わたしと読書

### イマジネーション

(財)心臓血管研究所 スーパーバイザー 須磨 久善

大学を卒業して外科研修医だった頃、月の半分は病院に泊り込んで手術後の患者さんの術後管理をしていた。様々なモニターの機械的な音の中で、徹夜で時間を過ごすのはかなり疲れる。そんな時の唯一の楽しみは読書だった。読みたい本を持っているときは、深夜のICU勤務が苦痛ではなく、読みたい本が手元にないときは眠気との戦いに終始する。本を読むということはまさにイマジネーションの触発で、読み始めるとそこに書かれている世界が鮮やかに浮かび上がってくる。Claude Bernardの『An introduction to the study of experimental medicine』を読み進めば、自分が実験室にいて新しい発見を求めて夢中になっている姿が浮かび、Walter Isaacsonの『Einstein』を読んでいると、自分が光の粒子になって走っている気分になる。勿論、医学ミステリー小説にも没頭させられた。中学生の頃、Michael Crichtonの『アンドロメダ病原体』を読みながら、自分の身体が感染症にかかったような錯覚に陥って寒気がしたり、またIsaac Asimovの『ミクロの決死圏』を読んでいるうちに、自分が人間の体内を旅していると思ひ込み、思わず鏡で自分の目を見つめたものだ。心臓外科医を目指していた頃、ハーバードの眼科医であるRobin Cookの書いた『Godplayer』を読みながら、手術室での様々なやり取りや、すばやく鮮や

## ● 略歴 (須磨 久善)

1950年3月1日 兵庫県生まれ  
1974年 大阪医科大学卒業。卒業後、虎の門病院、順天堂大学での外科研修を経て、1983年より大阪医大で冠動脈手術に着手し、胃大網動脈グラフトの使用を開始。  
1989年～1994年 三井記念病院循環器センター、心臓血管外科部長(1992年より)  
1994年～1996年 ローマ・カトリック大学心臓外科客員教授  
1996年～2000年 湘南鎌倉総合病院心臓外科部長、院長(1998年より)  
2000年～2005年 葉山ハートセンター院長  
2005年～ 財団法人心臓血管研究所スーパーバイザー。現在、順天堂大学医学部客員教授、京都大学医学部臨床教授を兼任



かに難しい心臓手術をやったのける主人公に自分を重複させて興奮したことを思い出す。

私は花の本も好きなのだが、特にバラの歴史には興味を引かれる。というのはバラそのものがイマジネーションの産物だからだ。蓬田勝之作『薔薇のパルファム』によれば紀元前五千年頃、メソポタミア文明時代に記された古代のバラに始まり、新しい形、新しい色、新しい香りを求めて交配を重ね、今では25,000種類に及ぶという。新しいものを創り出すためには斬新な発想が不可欠で、まさに「Imagination is more important than knowledge」(A. Einstein)である。

イメージを形にする挑戦はバラ作りにも外科手術にも共通する。人の身体を切って癒す外科治療は五千年前、古代エジプト時代から行われていた。以前、ルクソールからアスワンダムまでナイル川を旅したとき、古代神殿の壁に並んだ象形文字の一つに、眼の傍らにナイフが描かれていた。身体の各部の手術は古くから行われていたが、古来、心臓にメス

を入れることは神の意思に反すると考えられ、心臓は手術の対象とはならなかった。近代になっても動いている心臓を切ることは出血による死を意味し、一方で、心臓を止めて手術を行う安全な方法もなかった。二十世紀中頃に、何とか心臓と肺の代わりをする装置を作りたいと考え続けた人々のおかげで、人工心臓が開発された。心臓は止まっても身体は生きていくという環境ができたことにより、数多くの画期的な心臓手術が考案された。

心臓外科は変化の歴史である。無から有を生み出すがごとく、治療する術のなかった致死的な心臓病に対して新たな発想、革新的な技術を駆使して、数百種類もの画期的な心臓手術術式がこの50年間に考案され、実施された。その進歩のスピードは数多くの医学分野の中でも特筆されるべきものである。約30年前、私が術者となって自分の手で心臓の手術を行い始めた頃、米国の著名な心臓外科医で元祖「神の手」といわれた Dr. Denton Cooley による心臓手術書『Technique in Cardiac Surgery』を貪るように読んだ日々のことを思い出す。この本は様々な術式を術者の目から見てわかり易く、重要な point、注意すべき pitfall について克明に記されている。そのおかげで、経験の乏しい手術に対しても十分なイメージ作りをして臨むことができた。Dr. Cooley の緒言の一言は今でも忘れずに心に刻み込まれている。「手術とは変化するものである。常に modify, simplify を心がけ、そして apply せよ」



熱心に聞き入る参加者

心臓外科医を続けている今も、読書は私のイマジネーションを心地よく刺激してくれる。

## 梓会と合同で研修会開催

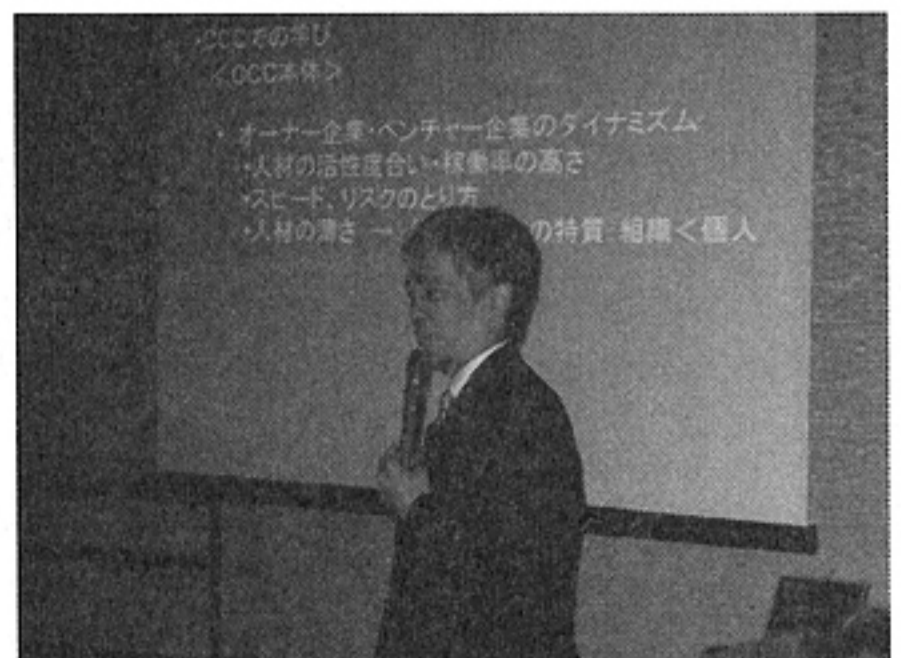
老舗企業の再生と継続的成長を目指す丸善・小城武彦社長を講師に迎え、「日本企業の経営者の役割と丸善の挑戦」と題する自然科学書協会・梓会合同研修会が、3月3日(月)に日本出版クラブ会館で開催され、当協会38名、梓会78名の計116名が参加した。

研修会は菊池明郎梓会副理事長の開会挨拶で始まり、経歴と裏話、日本の経営者の役割、丸善の挑戦の3部で行われ、当協会本郷理事長の「出版社は甘いと思った!」という挨拶で終わった。講演要旨は、以下の通り。

私は、略歴にあるように官一民一官\*民一民を経験してきた。その間に、金を稼ぐ経験のない自己欠陥や、役人は嫌なやつという社会を知り、またジョイントベンチャーの難しさや、借金をしてでも出資をといわれて会社経営の責任やリスクを体験した。また、産業再生機構に転職してカネボウの再生に取り組んだが、優秀な人材を抱えながら経営破たんした日本的経営の難しさを実感した。

企業には、「日本型(帰属型)組織」と「米国型(参加型)組織」がある。日本型は、終身雇用、年功序列、企業組合がある、中間管理職の裁量が大きい(ラクビー的)、株主の規律が弱い、経営者は内部昇格が大半などの特徴がある。一方、米国型は、終身雇用という保証がなく、取り組んだ仕事が終われば転職する職場主義(アメフト的)で、株主の規律が強く、経営者は外部調達などが特徴だ。

日本型組織が近年直面しているのは、資本市場のグローバル化が進展し、グローバル化した資本市場に触れたとたんに生じたミスマッチだろう。その結果、日本型から米国型組織運営が叫ばれるようになっているが、私は日本型経営が駄目なのではなく、経営の方法論を変えれば大丈夫だと思っている。日本型は、会社組織のロイヤリティ、チームワーク、やりがいを持つ従業員を生んだ。その結果、高いモチベーションを持つ社員が生まれたが、



日本型経営の強みや弱みの話に熱弁をふるう小城社長

一方で村組織で内向き、マーケットからの逸脱という悪い面も出てきた。

日本企業の問題に大企業病がある。個人面では、入社時の使命を忘れ、保身に走る。また、社内の人間関係を最重視するので仕事は上司に言われたとおりになり、競合会社などの動向に対する意識がなくなるという症状が出る。

組織面での症状は、なんとなく症候群や良かったのか悪かったのかわからない白黒つけない症候群、やりっぱなしや評論家的で責任を取らない人が多くなる。また、組織の変更や制度の変更が頻発し、偉い人ほど働かない症候群(給与の高い人が働かない)が出たり、マル投げするフリーパス症候群の管理職が増える。決断を回避する管理職、仕切りをしない管理職が多くなり、職業的世界観が矮小化し小世界へ埋没する。

これらの解決策として、従業員への働きかけが不可欠である。経営者は専管事項を、愚直に継続的に浸透させる活動が重要で、トップがいかに本気であるかを行動で見せることが大切だ。

日本型組織の弱点は痛みの伴う戦略的転換機能の欠落にある。そのために新たな戦略を立案・実施するときには、痛みの伴うことの説明が必要だ。立案はボトムアップということはまずないので、トップの強いリーダーシップが求められる。

以上のことを踏まえ、丸善の再生に取り組んでいる。丸善は明治2年に早矢仕有的が創業した日本初の株式会社で創業139年になる。日本型組織の悪い側面が一部表出していたので、米国型経営を少し取り入れている。その一つが、ヨーロッパで採用している知的資本経営である。知的資本経営とは、知的資本(人材、コンテンツ、ブランド、顧客基盤、パートナー、業態、組織。。。)など、木にたとえると根の部分の可視化し強化して、果実(財政業績)が目に見えるようにすることだ。

そのために、社員3,500人にアンケートを実施した(入社した理由、入社してよかったこと、など)。また、大学などの顧客に聞き取り調査をして、経営ビジョンを策定した。その結果、「知に生き、人間を信じる」という価値観のもと、「知を燈す丸善」という丸善ミッションを設けた。

手順として、「経営理念・ビジョン」を創り、「知的資本の可視化」-「知的資本化戦略策定」-「知的資本実施」-「知的資本開示」という流れで進めている。ビジョン創りは、根の状況を調べ、現場に足を運び、財務の視点、顧客の視点、内部プロセスの視点、人材の視点、プロセスモデルの視点などから進めるが、現在、知的資本の可視化まで来た。まだ途中であるが、真の日本型組織を追求する。  
(文責・新谷 滋記)

#### <小城武彦氏 略歴>

昭和36年8月8日、東京生まれ。昭和59年3月東京大学法学部卒業。平成3年5月プリンストン大学ウッドローウィルソン大学院終了。昭和59年4月通産省(現経済産業省)入省。平成9年7月カルチュア・コンビニエンス・クラブ(株)入社、同11年6月取締役、同13年6月常務取締役。平成12年5月(株)ツタヤオンライン代表取締役社長。平成16年7月(株)産業再生機構マネージ

ングディレクター、同年11月カネボウ(株)代表執行役社長、同18年1月退任。平成19年1月丸善(株)顧問、同19年4月より代表取締役社長。

## 専門委員会より

### ● 総務委員会

今期も残り数ヶ月となり、来るべき予算総会に向けて予算編成も詰めの段階に入っております。社団法人としての公益性を担保しつつどんなことができるか? 総務委員会としても検討しております。

さて、今期より当協会のホームページ管理を担当することになりましたが、お蔭さまで有能な実務担当者にも恵まれ、迅速なデータ更新を実現することができました。

ホームページに関する今後の課題は、

- ・安定的な管理運営に不可欠な組織づくり
- ・トップページを中心としたリニューアル
- ・運用コストの削減等を目的としたレンタルサーバー会社の見直し

などが考えられます。また、メーリングリストを活用した情報伝達の合理化や通信コストの削減なども今後の研究課題として取り組みたいと考えております。

過日「自然科学書協会概要」をお手元にお届けしましたが、この冊子に載せた自然科学書協会定款は、昨年9月に文部科学省より承認された新定款であることを申し添えます。  
(委員長 飯塚 尚彦)

### ● 著作・出版権委員会

今回は、文章や図版の転載許可に関する協会のガイドライン策定の現状について報告します。

1月15日付の手紙で、会員社の皆様ガイドライン(案)についての意見をお聞きしたところ、幸いにも、締切の2月末日までに6社から意見や疑問が寄せられました。ありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

近く著作・出版権委員会を開催し、お寄せいただいた意見や疑問にもとづいて「転載許諾のガイドライン」を再検討する予定です。できる限り寄せられた意見を反映し、疑問にお答えできるようにしたうえで、改めて理事会にはかり、協会のガイドラインとして確定させていければと考えています。  
(委員長 宮部 信明)

### ● 国際委員会

2006年に作成した英文会員名簿の改定を予定しています。今年9月1日(月)~4日(木)に開催される北京国際図書展示会は、オリンピックの影響と見られますが、天津に会場が変更されました。例年同様、日本事務局のトールから共同ブース(5ブース)の自然科学書コーナーへの出展案内が会員各社に届く予定です。ご協力をお願いします。ちなみに、去年の出品は、21社154点でした。  
(委員長 藤実 彰一)

### ● 販売・出展委員会

TIBF2008(東京国際ブックフェ)は7月10日(木)から13日(日)まで東京ビッグサイトウエストホールで開催されます。すでに、会員各社に理事長名による出品要

請の依頼状が届いているかと思いますが、今年は新しい試みを幾つか予定しています。趣旨をご理解のうえ、ご協力をお願いいたします。

これまでの出品は主として新刊書中心でしたが、会員社の出版傾向へのよりよき理解を高めるために、各社の代表的な出版物を数点出品していただくように特別な要請をしました。これに関しては展示陳列に相応の工夫をしたいと考えています。

また、今回新たな試みとして当協会のブースで展示するすべての出版物リストを作成して会報に掲載し、来場者に配布することにします。勿論、このリストには先の特別出品も含まれます。これは、広報委員会との連携によるものです。リストをもとに後に注文が書店やインターネットを通して寄せられることを期待したいところです。

さらに、かねてより委員会の反省事項として絶えず指摘されてきた事ですが、これまで対応できなかった著作権照会に対応する通訳スタッフの問題があります。これは、先般の理事会で何分にも予算が限られていることから各社にボランティアを要請しました。この呼びかけに応えた数社のスタッフ派遣により実現されるものです。東南アジア、とくに中国、台湾、韓国などからの著作権照会は年を追うごとに増える傾向にあります。具体的な成果を期待したいものです。(委員長 平田 直)

#### ● 情報システム委員会

先般情報システム委員会を開催し、より「研修」に特化した委員会へと発展させるという理事会の要請につき討議しましたが、出席された委員のあいだには(とくに協会の「公益性」を外部に向けてアピールするようなイベントの開催について)戸惑いがあったように感じられました。そこで理事会でさらに議論を重ねた結果、①今年度は従来どおりの活動を行う、②来年度からは新たな委員会とし、自然科学分野の出版を取り巻く諸問題に関する、会員社向けの研修会・勉強会を開催することを主たる活動目的とする、という試案が示されるに至りました。詳細を報告し、会員社・委員の意見をいただくため、近日中に委員会を開催する予定です。

(委員長 山口 雅己)

#### ● 広報委員会

2月15日に今号(2008No.2)のための委員会を、初めての試みですが、京都で開催しました。旧委員会のときから京都での開催は検討されていたとのことですが、なかなか実施までには至らなかったそうです。今回、委員長の私と電気書院・田中委員の二人が京都在住ということで、委員の皆様には遠路ご足労いただいた次第です。幸い、山本常務理事をはじめ委員全員に参加していただくことができました。

さて、広報委員会は協会会員社に、会を通じて協会の重要な活動報告を的確にお伝えすることが重要な任務です。と同時に、会員外の皆様にも当協会の存在意義や活動内容をお知らせすることも大事な仕事と考えております。それらを踏まえ、本年7月に開催されますTIBFに合わせ次号(2008No.3)では増頁し、当協会会員社の紹介とTIBF出品リストを掲載し、来場者にPRしたいと考えております。(委員長 曾根 良介)

## 第57期理事会・委員会開催一覧(2008年1月～3月)

### ● 理事会

2月21日(木) 2月定例理事会 15:00～17:00 日本出版クラブ会館  
3月19日(水) 3月定例理事会 15:00～17:00 日本出版クラブ会館

### ● 専門委員会

1月22日(火) 販売・出展委員会実行委員会 16:00～17:00  
文化産業信用組合  
2月7日(木) 総務委員会 13:00～14:30 文化産業信用組合  
2月15日(金) 広報委員会 17:00～18:00 京都「すみのくら」  
2月18日(月) 常務会 18:00～20:00 巣鴨「田村」  
3月5日(水) 販売・出展委員会 16:00～17:30 文化産業信用組合  
3月6日(木) 委員長会議 12:00～14:00 日本出版クラブ会館

### 【事務局より】

#### ◆ 訃報

元理事長山本俊一氏(培風館)が、2月27日永眠されました。享年97歳。  
ご冥福をお祈りします。

◆平成20年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞理解増進部門に、朝倉書店、オーム社、培風館の三社が決定しました。

#### ◆ 住所変更

株式会社鹿島出版会より住所の変更があった。

旧住所 東京都千代田区霞が関3-2-5

新住所 東京都港区赤坂6-2-8

#### ◆ 事務局変更

退任 寺澤 英一

新任 常盤 敬之

### 編集後記

天ぶら蕎麦の食材のうち86%は輸入とか。海老の自給率は、わずか5%、蕎麦も60%が中国からの輸入。醤油の原料である大豆は、なんと100%輸入だそうだ。輸入がストップしたら我々は天ぶら蕎麦どころか、一杯の掛け蕎麦も食べられないことになる。日本の食料自給率はわずか39%。先進国で、こんな国はない。

中国からの輸入餃子事件にみられるように、輸入食品の安全性が問われている。一次産業をないがしろにしてきた付けがまわってきた。「安全な農作物を食べられるのは、自ら無農薬で栽培することができる農民だけだ」と佐賀県在住の農民作家・山下惣一は数年前に、この事態が来ることを看破していた。

わが国は認定農業者という名の下に、小規模農家や兼業農家を切り捨てようとしている。食をないがしろにする国は滅びる。今以上に農業書の出番がくる国にしなければ……。(Y)

### 第57期/第58期広報委員

<担当常務理事> 山本 格(培風館)

<委員長> 曾根 良介(化学同人)

<副委員長> 新谷 滋記(工業調査会)

森田 猛(緑書房)

<委員> 朝倉誠造(朝倉書店)・安原 仁(家の光協会)・長 滋彦(技報堂出版)・牛来真也(コロナ社)・三宅恒太郎(彰国社)・田中久米四郎(電気書院)・柏原徹二(南江堂)